

## 都市保全計画と椽内吉胤および都市美協会との文脈

正会員 酒井憲一

キーワード 都市保全計画、歴史的環境、風景、町並み、椽内吉胤、都市美協会

## 1. はじめに

## 1-1 都市保全計画とは何か

新しい都市工学領域の学問として、「都市保全計画」が東京大学で15年前から開講され、2004年9月にその集大成として1047頁の事典的教科書『都市保全計画』（東京大学出版会）が出版され、世に問われた。開講者である著者は、大学院工学系研究科都市工学専攻教授西村幸夫（都市計画）である。

都市の破壊でなく、さりとて単なる再生でなく、保存でなく、「保全」という語彙にこめられた意味を柱にして、古いもの、歴史のあるものを、残すべき価値のあるものを残した上で、新しいものを建設していく都市づくり、まちづくり都市計画領域における新開拓である。斯界では部分的に考え行われてきた面がないではないが、総合的に構築したものである。

要約すれば、歴史的環境保全主体の都市計画で、総合的には風景に統合するといった文脈であり、洋の東西を問わず膨大な過去のひとの手になった文化思潮や事例を踏まえる。巻末の歴史的環境に関する詳細年表が、都市保全計画の文脈集といえる。多数の人材や組織が登場、合流して都市保全計画という大河を形成している。



都市美協会『都市美』創刊号題字

西村の都市保全計画は簡潔に小項目の系をとらず多項目のまま示し、学習者各自が都市保全計画を自己把握し、その枠組み再構成を試みるよう示唆している文脈である。

保全は conservation であり、保存の preservation と区別した上で保全計画を論じているが、この都市保全計画の理念は「温故創新」と考える。

## 1-2 研究の目的と方法

本論では、椽内吉胤（とちない・よしたね）と、その主唱によって生まれた都市美協会の大正末期―昭和初期の都市保全計画における評価を抽出し、都市保全計画の自己把握構成枠組みにおける対比により、戦前都市美運動と都市保全計画との脈絡を考察することを目的とする。

## 1-3 既往研究

都市保全計画について、本格的既往研究は見つからない。椽内と都市美協会についての既往文献は散発的かつ断片的であり、初の詳細研究は、東京大学助手の中島直人の『20世紀前半における都市美を巡る一連の運動 都市計画に関する思考と都市の実形について』<sup>1)</sup>を待たねばならなかった。さらに椽内に絞り込んだ中島直人・

西村幸夫・北沢猛『都市美運動家・椽内吉胤に関する研究』<sup>2)</sup>および中島直人・鈴木伸治「日本における都市の風景計画の生成」<sup>3)</sup>および椽内著作を主文献に、筆者の聴講ノートを起こしてコメントを織り込んだ『西村幸夫「都市保全計画」&東大研究室ホームページ熟年聴講生日誌』<sup>4)</sup>を補助資料として本論を書いた。

## 1-4 椽内吉胤と都市美協会

椽内吉胤の戸籍は栃内で、都市研究家以後は椽内を通ず。1888年盛岡市生まれ、早稲田大学英文科卒業、東京朝日新聞社会部記者時代に都市問題をライフワークに選び、2年で退社し都市美運動家・都市研究家となった。社内においてポスツ的に恵まれて都市問題に名を連ねたり、役得的取材を梃子にして専門家になるジャーナリストと違い、草の根の自力開拓で専門家となった数少ない人材。関東大震災後の1925年、都市美的復興推進を目的として、都市美研究会を立ち上げ、翌年都市美協会として実践団体に発展させ、都市美運動に影響を与えた。

## 椽内吉胤の3著書

1. 1922年（大正11年）3月『環境より見たる都市問題の研究』東京刊行社
2. 1926年（大正15年）12月『都市計画』のれん屋書房、発売廣林堂書房
3. 1934年（昭和9年）4月『日本都市風景』時潮社

## 2. 都市保全計画の構成

## 2-1 風景に統合

John Ruskin の未来は過去のうちにあるという考えを基盤思想とし、現時点の眼で都市の過去を歴史的な文脈で評価する文化的視点を重視し、生きたまま特質を活かした都市の補強再生を図る都市保全計画は、そのための都市調査と現在の都市・地区の構造評価、基本構想、基本計画、詳細地区計画の立案、具体的実施規定の確定と段階を踏む。それは「調和した環境の総合指標」を追求するもので、「何のための都市保全かは風景に統合される」<sup>5)</sup>と結論し、随所で都市美に言及している。

## 2-2 自己把握による構成

講義では「歴史に学べ」「市民に学べ」「海外に学べ」のいわば「3つの学び」が強調された。これを指標に膨大な都市保全計画の脊梁を筆者なりに絞って構成してみると、下記表1のようになる。

## 3 都市保全計画における椽内の評価

## 3-1 本文と歴史的環境に関する年表

椽内の記述は、長大な本文と68頁にわたる「歴史的環境に関する年表」において各2箇所もある。

<本文>「都市や集落の景観に関しても椽内吉胤は昭和初年に各地を訪れその町並み景観を称揚している」<sup>6)</sup>

「歴史的な町並みを保全しようという主張は椽内吉胤の

主張や大原総一郎による倉敷の保存構想など、戦前にまでさかのぼることができるが、断片的であり、全国的な世論にまで盛り上がることはなかった。また参戦によって一時中断のやむなきに至った<sup>7)</sup>

<年表>1929 椽内吉胤、閑宿の保存を『週刊朝日』(16巻6号)誌上で主張、1934 椽内吉胤『日本都市風景』(出版)

### 3-2 西村の椽内観

西村の椽内観は「町家が並ぶ様子を表す「町並み」(まちなみ)という言葉は古く、近世初期の仮名草子や浮世草子にも用例が見られる。近代に入って町並みを守るべき対象として最初に発見したのは椽内吉胤(1888~1945)であろう。その著『日本都市風景』(1934)は都市美協会常務理事であった椽内が各地の新旧の都市風景を称揚するものであった<sup>8)</sup>に代表される。

西村の椽内評価をまとめると、次の5点であり、それが都市保全計画の文脈に織り込まれている。

- ・各地を訪れその町並み風景を称揚。
  - ・近代に入り町並みを守るべき対象として最初に発見。
  - ・歴史的町並みに対して客観的な文化遺産としての視点。
  - ・町並み回顧だけでなく、まちづくりの手がかりを認識。
- 8) ただし町並み保全の積極的視点はなく、断片的で全国的世論に盛り上がりえなかった。(都市美協会も同じ)

### 3-3 索引

膨大な事項から精選された索引総数約 3000 中日本人名は 21、うち椽内吉胤が 2 箇所という高い評価である。

## 4 都市保全計画における都市美協会の評価

表1 都市保全計画と椽内吉胤の対比

自己把握	都市保全計画(西村の他著作からも引用)	椽内吉胤
理念 温故知新	John Ruskin 未来は過去のうちにある。「建築なしでは記憶することはできない」『建築の七灯』	シビック、テーストを持つことで都市芸術が発酵。漫然書齋や画室に閉じこもっているべきではない。
歴史 風景	何のための都市保全かは、調和した環境の総合指標としての風景に統合される。	地形的特性に順応し利導。都市美学の上では都市風景の代りに都市個性、都市風格というべきである。
歴史 町並み	産業革命と地域開発の波に対抗、1900 年前後から愛郷運動が盛り上がる。伝建制度重要である。	街並みに見る一種の美しさはどこから発祥するか。漸次共同の住家として都市を考え愛市中心の芽が萌でる。
歴史 文化財	芸術的価値、建築技術、工芸、建築材料など歴史的、美的遺産を含む公共的空間を考える。	我国でも今後はその保存範囲を広めて、個々の物から、一地域一帯の物にまで及ぼすべきだと考える。
市民 まちづくり	地域ごとの特殊解を越えるひとびとの行為の総体。住民主導によるアメニティ維持機能維持。	我都会人が都市の改造に冷淡であるのは、都市研究者たちが都市の知識の民衆化、趣味化を懈つたため。
市民 市民主体	保全計画立案・実施の主体については市民参加を保障する計画でなく市民主体の計画とする。	都市改造の力は、役所ではなくて、市民の共同に移り、随分思い切った改造計画が企図される。
市民 賑わい	まちの活力と魅力を高め、生活の質の向上を図る。まちづくりが元気なところは祭りも元気。	日本の代表的な散歩街は、世界の有名な巴里、伯林、倫敦、イタリーなどの散歩街にくらべ一段と負けている。
海外 グローバリゼーション	主要国の歴史的経緯が都市計画の枠組みに大きな影響を与え、各国がめざすゴールも共通化。	各々の都市を内的外的に整齋したものにしようという切実な要求は、海外諸都市の心臓に高まりつつある。
海外 アジア	強固な民俗的伝統など無形文化遺産が多く、生活様式などに固有な地域性が欧米より濃密。	学ぶ対象を欧米と日本に限定していて、アジアへの関心は希薄で、論評、記事とも見当たらない。
海外 世界遺産	1975 年世界遺産条約発効後、とりわけ文化遺産が増加、範疇に文化的景観が加えられた。	セントポール寺院に止まらず、由緒ある造営物に常に注意を払い、市民の共有的財産として美を永遠に伝える。

東京大学工学部研究生/都市デザイン研究室(Univ. of Tokyo)

## 4-1 歴史的環境に関する年表記載

年表では都市美研究会発足、都市美協会との改称、植樹祭、機関誌『都市美』創刊、全国都市美協議会開催などの事項のほか、建議書については全部記載している。建議書のうち警視庁庁舎望楼撤去に成功した事例は、「10m撤去」と結果を添え評価している。

都市美については、1893 年シカゴ万博を契機に起こった civic beautiful movement の影響もあり、1910 年代に入りわが国において美観を意味する用語として登場し、椽内、都市美協会もほぼこの意味で使っている。

### まとめ

椽内吉胤、都市美協会ともに限界はあったが、いずれも一種の都市美運動であり、その系譜を都市保全計画に摂取し、市民主体の都市美保全における諸問題を考える上での長所、短所を咀嚼する事例として重視されていることは、現代的意義が見直されたことになる。

### 注

- 1) 2000 年度修士論文
- 2) 2001 年度第 36 回日本都市計画学会学術研究論文集
- 3) 『日本の風景計画 都市の景観コントロール到達点と将来展望』西村幸夫+町並み研究会編著、学芸出版社、2003 年
- 4) アメニティライフ、2004 年 12 月
- 5) 『都市保全計画』p. 24
- 6) 『都市保全計画』pp. 70-71
- 7) 『都市保全計画』p. 143
- 8) 西村幸夫「町並み保全型まちづくりとは」『まちづくり教科書第 2 巻町並み保全型まちづくり』丸善、2004 年、pp. 32-34